

泥棒とイーダ

第11回 直せない誤謬ごびゆらう

牧田真有子

七月はじめに目黒さんがイーダ会をやめた。

よく発言し目立つ存在だったのにぱったりと音信が途絶えた人や、室木むきと諍いさかいになってそれきりの人、水たまりが乾いていくように気取られずいなくなった人たちなら、今までにもいた。しかし彼女のように、実が成ったので今から枝を離れる、と表明した人はいなかった。送別会というのもこれが最初だ。私はセツに頼まれて、早朝から思うさまドーナツを揚げ、まだ熱いのを詰めて佐原さはらさんのアパートへ向かった。

目録メックを通してメンバー間のやりとりの内容は格段に充実してきた。セツが、まず実行してみても都合が現れてから修正するというやり方を好むために、目録の様式はたびたび更新された。根本的に変わったのは報酬の発生だろう。「責任感が生まれる分、サービスの質が高まるはず」というセツの意見は、「ただでさえ責任感が強すぎて罪悪感にまで至りがちなメンバーにサービス向上を強いるとはひとでなし」という室木の意見を抑えた。何より、セツの意見に他ならぬメンバーたちの多くが同意したのだ。傍目はためには室木の方が正しく思えることも度々あったが、誰に靡なみくかという凶式は一旦決まると簡単に書き換えられるものではないらしかった。黒星がつかないように、セツは何を提案するかについては慎重に選んだ。私には話してくれた、実名登録のみに切り替えたいという思いもメンバーの前で持ち出すことはない。

そして、個々の能力の所在をまとめるという性質で始まった目録に「サービス」という提供型の視点を加え、全体の比重まで変えたのは、目黒さんだったと思う。パソコンや語学に強い会員は引く手あまたである一方、とりたてて特技のないメンバーには声が掛かからないという事態

は、当初は避けがたく起こっていた。目黒さんがつくったのは、自分の頭上を流れていく視線を自分に向けさせる回路だった。「鱗うろこの刺繻しゅう」の需要が少なくなる頃にはまた別にピンポイントなプログラムを打ち出していた彼女のページは常に人気で、それに倣ならう人が続出した。

たとえば同じく手芸の得意なあるメンバーは、「世界に一つだけ、あなたの大事なペットのマスコットを作ります」というサービスを掲げた。ペットの写真を借りて、小さいがリアルなぬいぐるみを製作するのだ。それまで職場や学校では携帯の写真データ等でしか見ることができなかった自分のペットの像を、手触りのある分身として持ち歩けるというのが売りだった。「ストラップやキーホルダーにできるんだよ、ほら」。その人は試作品を見せてくれ、部外者の私だけに、ささやくように言った。「そのペットが亡くなったときにもほんの少し役立てればと思ってる」。

芸大の学生による、県内と周辺地域における「展覧会の新着情報の配信」も、チェック漏れもが減る、と美術好きの間で定着した。自転車の愛好家は、「あなたに合った自転車選びのアドバイス」を挙げたものの軌道に乗らず、やがて、発注者の体力やかけられる時間、どういう風景の中を走りたいかといった細かな要望に合わせた、「地元でおすすめのサイクリングコースを立てます」が彼の看板商品になった。

遠く離れて暮らす会員は、地域性の制約がかからない、オンライン上で完結できるサービスを提供した。「動画での料理の基本教室」を始めた人は、本ではわかりにくい各種の野菜の洗い方や切り方、魚のおろし方、調味料を加えるタイミングなどを体系立てて映像で教え、内容に関する質問を受けつける。「写真を利用した絵本制作」では、発注者の送った複数の写真データが画像処理され、個性提供者によりストーリーが添えられて、デジタル絵本に仕上がる。いくつかの質問項目に答えていくことで発注者の好みに合った映画が導き出される、というものもある。そこでは、結果が実際にどれくらいマッチしていたかという発注者からのフィードバックが重視され、その情報を蓄積していくことでより精度の高いサービスをめざす、と謳うたわれている。

その陰で、登録はしたものの馴染めなまますっぱり両手を離してしまいうケースも当然あった。水に潜っているかのように言葉少なで、自分について表わそうとしない人たち。「特技も趣味もない」とあっけなく言い切る人たち。セツは彼らをどうにか繋ぎとめようとした。過去のつきあいから、時にはイーダゲブログへのコメントの蓄積から、彼ら自身があいついでいない資質を引き出そうとひそかにつとめていたのだ。その全てが成功したようには到底見えなかった。しかし何人かは、たしかにセツに応えようとした。自殺という方法以外で自分を消してしまいたく入会したが、他人に応えようとする自分を発見して初めて、「新しい私たち」の一部になりたいと心から思えた、と言った人もいた。

目黒さんの退会の理由は、自分には複数のことを掛け持ちする処理能力がない、というものだった。彼女がこれからしたいことは、自分の特技が全くの他人にどこまで通用するのか、実際に生きる術につながるのか試すことであり、それは目録の利用がメンバー間に限られているイーダゲでは望めない。

その日も目黒さんは、刺繍力を発揮したすごい濃度のワンピースを着ていた。「この人は何よりもこれをしているときにいちばん根性が据わっているんだな」と思わせる手仕事だ。相変わらず本人は、うつむき加減に暗く微笑んだりその微笑まで顔の奥へ引っ込めたりしてばかりいるが、これほど他人を惹きつけるものが作りだせるのだからもう本人の様子なんてどうでもいい、という安定したトーンが宴席に満ちていた。車座の中には料理のほかに二十人分の紙皿と紙コップがせめぎあっていた。酒は森瀬^{もりせ}、肴は内林^{うちばやし}さんが商店街で調達し、目録の特技欄に料理を挙げているメンバーはここぞとばかりに和洋中の凝った惣菜^{そうざい}を披露し、家事全般が苦手なセツは必要以上に慎重な手つきでバゲットを切り分けてはいわくありげなペーストを塗り、室木はところてんを押し出すのに余念が無かった。史乃^{しの}は美術部の行事で不参加のようだ。

室木主導のボランティア活動には参加するものの、彼女がこの佐原さんの部屋に姿を見せることはあまりないらしい。訪れてみたら死に物狂

いで肉体を鍛えている校正者一人しかいなかった、という困難な局面を
予め避けているのだろう。
あらかじ

宴の途中で挨拶を促された目黒さんは、最初にこの車座に加わったときと同じように、ワンピースの生地を指先で摘みながら言った。

「幸福な場にながらも幸福じゃない。そんな自分の内側は無視して、場のパートになつてしまいたいっていうのが、入会するときの動機でした。今はもうその動機をなくしてここにいます。イーダ会に入ったから、イーダ会に入るときの動機をなくすことができました。あの目録のおかげです。自分の内側は大して変わってなくてもやもやしてるけど、以前のようにそれに引きずられなくなったのは、現実的にできることの輪郭がはつきりしたからだと思ってます」

そこまで言つて彼女は顔を上げ、ぐるりと輪になった人たちの中でたった一人、セツだけを直視した。私も気になっていた。登録者数が多ければ多いほど多様なマッチが生まれる目録から、一人去るのだから、セツにしてみれば複雑な心境かもしれない。しかしセツは徹底的にシンプルな表情で大きく拍手している。

今日は仕事がないらしく、佐原さんは文机に背を向けて座っていた。ハイイロが取り分けて運んでくれるひじきの煮つけや木耳きくちげのサラダに、いちいち鼻を近づけて嗅いで、残さず食べている。壁掛けのカレンダーは五月のままめくられていない。おひらきとなりこの部屋を後にするとき、目黒さんはすぐそばまで早足に歩み寄つて、彼の前で正座した。「今までありがとうございます。私、代表が何のためにいらつしやるのかわからなくなるたびに、代表のいないイーダ会を想像しようとしてみました。そうすると像が結ばないんですね。代表はわけのわからぬ存在だけど、『腹の中では何を考へてるんだか』っていうわからなさじゃない」

「セツと違つてね」

誰かが茶々を入れた。男の声のようでも女のようでもあった。目黒さんは聞き流して続けた。

『中』がないから。代表の存在はそのままイーダ会の立地なんですかね？ だったら代表自身はイーダ会にはたどり着けないんじゃないかって、それが心配です。でも少なくとも私は代表に救われました」

目黒さんは佐原さんの鳩尾^{みぞおち}辺りを見つめたまま挨拶を終えた。佐原さんは不安げな彼女の顔をしげしげと見つめたあと、文机の抽斗^{ひきたし}を開け、扇子でも入っているらしい「粗品／飯田酒店」と熨斗^{のし}のついた細長い包みを抜いて、黙って両手で差し出した。ぶつと吹き出したのは森瀬に違いなかった。王様は裸だと指摘する子どもみたいに、最近のこの人は憚ることなく佐原さんを軽視する。取るに足らない人間だけれど、ここではそういう設定のようだから表面上は立ててあげている、と言わんばかりだ。目黒さんは両手で粗品を押し頂いた。

私は遠回りして目黒さんの帰り道につきあった。佐原さんの台所の窓から見える雑木林沿いの道だ。姿の見えない大きな鳥が羽ばたいている。「亜季^{あき}さんのドーナツを、もうあんまり食べられないことが心残りですね」

目黒さんは言った。朝からずっと私は物悲しかった。しかし考えてみれば、思ったことは何でも、相手が代表でも口にする人なのだ。揚げ菓子以外の未練は特にないのかも知れない。真意は確かめられないまま、土の匂いがする気持ちのいい初夏の道を、目黒さんの小さい歩幅に合わせるで歩いた。

駅舎の前には、ずんぐりした蘇鉄^{そてつ}、どうしても形を覚えられない金属オブジェ、それに花時計がある。いつもより早く家を出たとはいえ時間はあまりなかった。レンタルDVDの返却を済ませるため通学路を変更しているのだ。朝の駅へ向かう人たちをくねくね避けながら走ってきた私の自転車は、学習塾とお好み焼き屋に挟まれた店の前で止まった。カウター前には気忙^{きせわ}しげな人たちが並んでいる。最後尾につき、今自分が入ってきたガラスの自動ドアの方を見て、私は「あれ」と口の中で言った。店の前のバス停に佐原さんがいる。バスを待つ長い列に紛れてい

るからさっきは気づかなかった。コンビニの袋をぶら提げて足もとはおじさんサンダル。いかにもちよつと家を出てきただけという風貌で、彼は自分の前に立つ若い男の背中を注視している。

どこへ行くんだろう、こつちを見ないかなと思つて眺めていた。そのうち、胸の底がカタンと抜けてぬるいものが這い上がってくるような、嫌な感じがした。透明な自動ドアがひらいたら、佐原さんだけがあの列から消えている。なぜかそんな映像が頭に浮かんだ。

私の返した洋画のDVDを店員が手早くチェックしている間にバスが到着した。佐原さんは乗り込んだ。私は奇妙な喪失感を抱いて高校まで自転車をこいだ。

一時限目には間に合った。チカにも普通に挨拶した。しかし着席してじっとしてしまふと、いても立ってもいられなくなった。動詞の活用形を板書している古文の教師に、体調が悪いのでとくぐもつた声で告げて私は廊下に出た。生徒が一方向に詰まっていたくつもの教室の横を通り過ぎるやいなや携帯電話をひらき、誰もいない東階段を下りていく。佐原さんの携帯の呼び出し音は留守電に切り替わっただけだ。そのとき小さく名前を呼ばれた。立ちどまって振り仰ぐと、沼男ぬまおが二段飛ばしですぐさま近づいてきた。

「さぼるにしても、せめて保健室に近い西階段に向かうくらいの小芝居はしろつて。先生にばればれじゃなか」

私は言葉が出てこなかった。沼男は少し困惑した表情になり、それでもどうしようもなく丈夫そうな、しつかりした声で言った。

「どうした。新種の顔色だけど。さぼりか半病人かわかりにくい」
彼は手首に麻紐の腕輪を嵌めていた。チカが編んだのだ。チカ自身がつけていたものよりずっと美しかった。それを見て、私はやっと息を深く吸い込めた。

「なんか私、佐原さんに対する反射神経みたいなものが、作動してない。車酔いの名人がバスに乗るはずなのに。佐原さんの前に並んでた人はきつとコンビニのレジでも佐原さんの前に並んでたのね。佐原さんはそ

の人の服の模様の、アメモミの校正でもしながら、つられて停留所まで行き、そして乗り込んだ」

名探偵みたいな口調になった。「大丈夫か」と沼男は言った。

「きつと吐いてるでしょうよ。電話にも出ない」

「ちがう、亜季に言っただよ。反射神経でそこまで勘繰ってやらないと駄目な関係って、何なの。そうか、あっちが全く亜季のことを察してないから、比重が滅茶苦茶なのか」

沼男は自問自答し、私の携帯を顎でしゃくった。

「メールならいけんじゃない。ちよつと貸して」

そんなわけがあるかと思っただが、活字には並外れて執念深い人ではある。私とは比較にならぬほど、沼男はあの薄いボタンを押すのが速かった。

『失礼します。もと六班の沼木康男です。いい歳して勝見亜季さんに甘えすぎなんじゃないですか？』

数分経ってから返信があった。メールを打つのもままならないのだろう。

『恐れ入りますが、すっこんでいただけますでしょうか』

私たちは揃って息を呑んだ。悔しがつているとは絶対思われたくない、と言って沼男はもはや私とは無関係な挑発的の文面を送りつけた。

『あやうくはにかみそうになりましたよ』

やはり数分の後には返事が届いた。

『お前のような方は一生はに自分でおられたらよろしい』

『ああちくしょう』

「たしかに」私は沼男をねぎらった。

沼男は改めて連打した。

『手加減してやれよと申しているのです。亜季はまだ子どもなのですよ』

丁寧さに亀裂の走った佐原さんの文面と、苛々しながらも一応年上に送るので気を遣っている沼男の文面とは、得体の知れなさにおいてい

勝負であった。

「同じ歳のくせに」私は横から文句を言った。

もう返信はなかった。あるいは気絶したのかもしれない。私は携帯をポケットに滑り込ませて意味もなく片足を踏み鳴らし、沼男の顔を見た。「ありがとう。何だかよく、わかった。あのひと変になっちゃったんだ」

平静を装って言った。沼男は眉を上げた。

「むしろ今まで何がわからなかったんだ？」

「前からわりと変だから、とうとう画期的に変になっても深刻さがびんと来なかった」

「前から画期的に変だったぜ」沼男は静かに主張した。

私は決めかねる表情をしてみたが内心、違うと思っていた。脚立を蹴り倒して縄にぶら下がっていたら、佐原さんはここまでおかしくなることは免れた。まだ使えるものを棄てられないという習慣によって、彼はもう自殺を試みない。けれどあと少しのところでは彼自身を、彼が望む一つの死として完成させない理由が、その習慣以外に何もないということは暴力的だ。見方を変えれば、そんなものだけが佐原さんの完成を拒んでいる。どんなに些細な異物も見落とさぬよう神経を研ぎ澄ませて完成を求める、あの校正の仕事に明け暮れながら、彼自身はもう、いるだけで誤謬だ。

「本当に、好きなんだよな？」

沼男はにわかに小声で念を押した。ポケットに両手を突っ込んでいる。「夢中なのよ。この期に及んで。どういうわけか全くわからないけど」
私が答えると沼男は苦笑いした。

「あのひととうまくいく確率なんて低すぎる。今俺の心に浮かんでる、一つの学術的イメージを言い当てるくらい、難しいと思うね」

「すっこむ」の五段活用じゃないでしょうね、と私は笑った。当ててどうする、と沼男は細い目を吊り上げた。埃っぽい階段に夏の光が注がれていた。二人で短い一列になって上がった。

『代表こんばんは。私はもうそこにいますか』

『代表こんばんは。私はもうそこにいますか』

『代表こんばんは。私はもうそこにいますか』

夏休みに入って間もない平日の夕方、桔梗色のワンピースを着た私は小走りで銀行のATMに滑り込み、その足で佐原さんのアパートに向かった。普段も引き出すのは手数料のわからない放課後だが、届けるのが日曜なのは、制服ではなく自分の格好で会いに行きたかったからだ。風がつよく、街の角々では自転車や背丈のある鉢植えが物言いたげに倒れたままで、薄青い空に金の三日月がくつきりと浮かんでいた。廊下に面する窓を網戸にした佐原さんの部屋からはがやがやと話し声が漏れていた。常にはない人数だ。丁度会合のときに来てしまったのかもしれない。

細くドアを開けると最初に史乃と目が合った。互いの視線の弾力で、首がかすかにのけぞりそうになる。ヨーと喋っていた史乃は、一瞬沈黙した。悲鳴から音を抜いたような、余白のない沈黙だった。彼女はすぐ優しい表情になった。私は足もとを見ないままサンダルを脱いだ。階下に住んでいるヨーが立ち上がり、「扇風機持ってくる」と誰にともなく言った。まだ開始時刻ではないらしい。部屋には室木やセツ、森瀬や内林さんのほか、十数人の顔見知りや初対面の人が思い思いに固まっている、私は合間を縫った。「この部屋のエアコン壊れたままなんだよね」とすれちがいざまにヨーが笑いかけた。修繕することをやめた佐原さんの姿を見るのは、こわくて、私は文机の方をたしかめなかった。

史乃も小さな袖の木綿ワンピースを着ていた。でも彼女の生地には、刺繍が一つ施されていた。鱗だ。

「目黒さんの刺繍講座？」私は言った。

「そう。やめることないのね、あの人」

自分から何食わぬ調子で口をきいたくせに、相手からも何食わぬ様子で応じられると私はたじろいだ。白いすべすべした肌をほうぼうから出した史乃の明度は、夏の夕暮れの明度と、誰よりも近似した関係にあるように見えた。あるいはその近さは、ただ彼女の質感に還元できるものではない。「観客席」から「舞台」へ駆け上がろうとする史乃の足音を、私は知らず知らず聞いているのかもしれない。

「話には聞いてたんだ。亜季のこと。会員じゃなくてマスコットガールとして」

「一部の偏った見方が入ってるけど、会員じゃないのは事実」

崩した正座をしていた史乃は、三角座りへと足の形を移した。隣の私も同じ格好で、二人ともワンピースの裾を都合して太腿の裏をくるんでいた。史乃の腕はすんなりと余裕があり、素足の甲もその先の指も長い。この人に詰め寄られると、身長差だけでも、圧倒されたものだった。ずっと彼女が私に気兼ねしていたこと。死ぬと言われたこと。お金を取られたこと。鮎の泳ぐ池に沈められた体操着。彼女が攻撃する私と、私を利用する彼女との癒着。繰り上げ式の和解。和解のからくりを蔵している空間に、イーダの一部ではない私が現れたときの、彼女の揺らぎと、ただそれを取り越えるためだけに顔の底から浮かんできた微笑み。

私は正直に言った。

「こうやって、いかにも普通に史乃と話していると、自分が誰かわからなくなる」

「私だって同じだよ。でもいい。自分の正体なんてわからなくなる方が好都合なもの」

言いながら彼女の視線は私の顔の後ろにずれた。振り向くと佐原さんが私たちのすぐそばに腰を下ろすところだった。

「亜季。仕事を、しばらく休むことになった。どうしてもできなくなってる」

「わかった。通帳に入金記録がなくても、出版社に乗り込んでいったりしないようにする」

佐原さんのがたつきを承知している私はそう言って現金の入った封筒を手渡し、史乃は「お体の具合がよくないんですか」とスタンダードな質問をした。胡坐あくらの佐原さんは壁を背もたれにしたまま静まり返っていた。生業なりわいを手放した三十路男みそじおとこに掛ける言葉など高校では教えてくれないので、私たちも口をつぐんでいた。やがて佐原さんは言った。

「亜季。仕事を、休むことにした」

私は驚いて「聞いたよ」と言った。

「俺しか知らないことで知ったかぶりをするとほな」

「代表、さっき仰いました」

史乃が心配そうに頭を傾けて彼の顔を覗き込んだ。佐原さんは目の縁をこわばらせた。扇風機の高さを調節中のヨーから離れ、コンセントを探してプラグ片手にうろろろしていた森瀬が、目ざとかった。「この代表、若い子に目がなすぎるわ」とせせら笑っている。薄着の季節がくると、といってもジャージの上を脱いでTシャツになっただけだが、この人は群を抜いてなまめかしかった。胸は勢いのある形をしていて、腰が細い。「年相応のきれいどころが揃ってるっていうのにねえ」と調子のいい合いの手で場をとりなしたのは、今しがた扇風機と同時に到着した渡会わたらいさんだ。私が個性提供者第一号として赴いたときと同じ、くしゃつと散らしたような短髪に蔓がモザイク模様の眼鏡。風通しのよさそうな服は麻らしく、皺が多い。

森瀬に限らず大半の会員が、目録のページとしては知っている渡会さんと、初対面らしかった。古株のメンバーだが彼女がここに足を運ぶのはめづらしい。ほどなく円座が作られ、史乃も、なりゆきで私も吸収された。彼がもたれている部分のみ壁に粘着力があったみたい、佐原さんとはどまっている。地元のアート活動を支援するグループに所属していることなど簡単に自己紹介した渡会さんは、塾まで娘を迎えに行くから長居できなくて、と母親の顔で付け足した。そこからは一旦セツが引き取った。

「今日集まってもらったのは、目録〈Ida〉について話し合いたいこと

があるからなんだけど。私は、会員制をやめて、これからは誰でも利用できるようにしたいと思う。どうかね」

一斉に声が上がった。大半は反対を表明し、普段より感情的になっていた。奇妙だったのは、その騒がしさの中で室木と森瀬が何も言わずに見つめあったことだった。セツは会員たちの反応に特に心を動かされた様子もなく、軽く息を吸った。これから彼女が、パーステイケーキの円に沿った蠟燭ろうそくを軒並み吹き消すように反対意見を黙らせていくのだろうと思うと、不穏なような楽しいような気がした。しかし結局そうはならなかったのだ。

セツの話はこのようなものだった。自分にできることをこれまでより意識的に点検し、深め、スタイルを編み出してイーダ会から自立した目黒さんを、本末転倒だと批難する人はきつといないだろう。彼女の刺繍プログラムは人気が高かったし、辞めると聞いたときは引き止めたい気持ちに駆られたけれど、考えてみれば私たちが彼女がいる位に接続してもいいはずだ。個性の貸し借りを自由にできる場があれば、私というものの質も変えることができる。その「場」は、要件つきの限定的な環境ではなく、そのまま現実空間と重なっているべきではないだろうか。それでこそ「大きな存在の一部」として自らを再定位できるのでないか。個性提供者が多ければ多いほどこの目録の利用価値が高まるのは皆も知っているとおろいだ。

最初に発言したのは室木だった。

「ユーザーの範囲を会員以外まで広げても、大きなトラブルなく今までどおり続けられると思ってるわけ？　うちの会員みたいに、嘘のつけない素朴な人たちばかりじゃないんだよ。利用規約だって厳密に定める必要が出てくる。不適切な出品は誰がチェックするんだ？」

「失敗してもやり直せるでしょう。どうしてそりリスクの方に気を取られちゃうの、室木さんは」

そのときセツは、目の前を浮遊している小蠅こばえを手刀で追いやっていて、彼の方を終始見なかった。彼は長い指を隙間なく揃えた手で自分の顎を

さすった。室木の内面がいつになくあっさり翳ったような、気がした。彼が臆病なのではなくて、誰のことも危険に晒したくないという本心からの発言だったと、セツを含め皆よくわかっている。セツのその程度のせりふで室木の真価が損なわれることは決してない。言葉で証すことのできない、そういう関係に、以前なら彼はもつと無造作に身をゆだねていた。

結局小蠅の好きにさせながら、セツは言った。

「今、渡会さんとながりのある若手のクリエイターが二人、目録〈Iida〉を通して作品を発表したいと言ってくれてるんだよね。『カラージュ作家』と『押し花アーティスト』」

押し花って、ひょっとしてRyo-Ryoちゃん？ という声が上がった。セツと渡会さんは満足げに頷いた。ローカルな番組でだが私もテレビで見たことがある。異国の人ではなく、何代も続く地元の旧家の次男坊だ。最近是一般の雑誌でも取り上げられたらしい。

「ただし彼らは、目録には加わるけどメンバーにはならないと言ってる。Iida会にも半狂乱の代表にも興味はないからって」

セツがそうつけ加えると、場の気配がざらりとした。今や「半」で足りるかどうか、と私は佐原さんの方を盗み見た。汗かきのヨーが風呂呂りのような顔を傾げた。

「いきなり大きなところで勝負するのがこわいからってことではないんだよね」

「そんなことはないと思うけど、」内林さんが、渡会さんに応じさせては悪いと焦ったようにすかさず緩衝材と化した。「ただやっぱり、会の理念を共有してもらえないと難しいところは出てくるかも。知名度が高くて実績もあるオープン制のコミュニティサイトが世間にはたくさんあるだろうし、そちらを利用する方が彼らのためなんじゃないかな」

『彼らのため』ね」セツは淡々と言った。「話は逆で、彼らが私たちのためにプロモーションしてくれるってこと。ファンが多ければ情報は広まりやすいでしょう。クローズドなコミュニティから、誰もが利用でき

るより自由な場へ変化させる、といくら宣言しても振り向いてもらえないければ変化したことになる」

普段の内林さんならうろたえそうな展開だったが、彼女はあと一步集中しきれないといった表情で「そうなの」と呟いただけだった。

「セツが依頼したんじゃないよね」誰かが言った。

渡会さんが張りのある声で愛想良く口を挟んだ。

「ちがうちがう。私が無気なく話したら向こうが乗り気になっちゃって。自分の専門をひたすら細く深く究めていくっていうんじゃないかって、自分の周りの環境とかをフル活用して可能性を絶えずバージョンアップして、アートを、もっと流動的かつトータルな生きた関係性の中で捉えなおそうとしてるのが彼らなのよ」

「アート」に弱い私は話の途中で目が泳ぎ、いつもなら佐原さんがいるはずの場所を眺めた。

紙束や資料や辞書類の載っていない文机はひろびろしていた。そもそも一般的な文机のイメージに、六人家族が鍋を囲んで団欒できそうなこのローテーブルはそぐわないと、今さら感じた。卓上カレンダーには二日前まで仕事のスケジュールが綿密に書き込まれている。一昨日を境に、突如暦の意味が理解できなくなったみたいに、白くなる。五月以降ついにめくられなかった壁掛けカレンダーはもうない。

メンバーたちは真摯に話し合っていた。メンバーでない私は、ぼんやりと匂いをかいでいた。セツの、演出の匂いだ。今回渡会さんから打診されるずっと前、おそらく、顔見知り同士でのコミュニケーションに意味はあるのか、と目黒さんに尋ねられて首を縦に振った計画段階からすでに、セツは会員制でなくすることを決めていたんじゃないかと私は思った。最初から自分の思い描く計画の全貌を見せても、メンバーには受け入れられない。だから目録に起因する退会者が出たり、渡会さんに提案されたりしたことをふまえたような形に整えながら、新しい計画を告げるタイミングを計っていた。

「代表はどうお考えですか」

渡会さんは水を向けた。応じてくれるわけがないとふんでいる常連は形ばかり振り返ったが、青ざめた肌の佐原さんは意外にも即答した。

「俺の考えはつるつるつるつるするようだ」

私は思わず目を伏せた。心が、叩き落されたみたいだった。佐原さんの変化を知らない人たちが平気で追従ついでしゅうわち笑いなどしている。性急な結論は求めている、何より自分もイーダ会メンバーの一人として、より望ましいのはどちらなのかまだ決めかねているのだからと皆に言い残し、渡会さんは帰っていった。

外では風がいよいよつよく吹いていた。

「葡萄ぶどうの匂いがしない？」

さっきまで全員に向かつて語りかけていたセツが、ふと隣の人に喋りかけた。生まれ落ちたときにはヘビューザーだったかのようにスマートフォンを扱っていた森瀬が顔を上げたのは、そのときだった。

「史乃みたいな子は、セツのやり方ではカバーできひんやろ」

「え？」

あまりにふいだったのでセツはまだ、葡萄のときの顔をしていた。

「わけのわからん世界に怯えるんやのうてその一部になってしまいたいと言うてる子に、刺繡習わせてもじゃあないわ。そやろ、史乃。ほんまは室木さんのプランの方があんたを支えてるんやろ」

森瀬が言い、セツは史乃の方を向いた。そして史乃がひどく決まり悪そうな表情を募らせる一方なのを見て、いつもの、誰のものでもあるセツの顔にバックしていった。でもなぜかもう遅いような気がした。

「現実社会から切り離れた村が、史乃の問題の解決に結びつくかどうか、検討する必要があると思うけど」

室木に配慮してのことだろう、セツの声はことさら事務的だった。

「そんな検討せんでいいわ。あんたも意外と幻想的な人やな。閉ざされた完璧な場所なんて実際に作れると思てんの？ 不完全な人間が作るんやから、不完全なものにしかならへんのは目に見えてる」森瀬は言った。おそらく全員が、室木の方を盗み見た。これではセツよりもむしろ森

瀬の方が、彼の考えを否定しているようなものだ。しかし彼は、反発するでも傷つくでもなく、黙って妙に強気な顔をしていた。

「史乃かて、今までと同じ環境にいるままでわけのわからん世界の一部分になったという実感をもてるなら、イーダ会になんてわざわざ入らへん。入会したのは、もとの場所では経験することが無理やったからやろ？」

森瀬はもう一度史乃に同意を求めた。史乃がぎこちなく頷くと森瀬はにっこりした。森瀬の、これほど芯からうれしそうな表情は、私たちの目には新鮮だった。大丈夫だ、私は君を愛している、と狂いなく伝達することのできる、やわらかな力のこもった笑顔。セツに見つめられて以来決まり悪そうだった史乃は、ようやく安堵したように、森瀬に微笑み返した。

時とともに目が徐々に慣れていくから、かろうじてそのように識別できるけれど、もし遅れてやって来るメンバーがいたらこの部屋の非常識な暗さに後ずさるだろう。故障中なのは扇風機だけではなかったのだ。半時間ほど前、ハイイロが電灯を点けようとしたが、スイッチがばちんと音を立てただけだった。蛍光管のストックもなかった。結局流し台の上の照明と、窓の外から入ってくる街灯の光を頼りに、会合は続いた。座っている位置によって、メンバーの顔は薄闇より手前にあたり薄闇に隔たれていたりした。壁際の佐原さんは暗黒と一体化していた。どこかの部屋の住人がしきりに咳き込んでいる。網戸越しの星々は豊かな光に見えた。森瀬は言った。

「彼女がほしいのは経験や。後々それを別の環境でも臨機応変に活用できる、心理的なベース、あるいは原風景と言うてもいい。それに必要なは短期間でポテンシャルを最大限に引き出すような、強化合宿みたいなもんやと思うねん。私は、室木さんの言うプランは案外、実際にやってみたらちよūdい塩梅あんばいになるんやないかと思う。決して完璧やない人間関係が凝縮された、けど、『自分』以前の状態、主客未分の状態に移行したいという目的は共有している、一個の集団。そこで生活したら

おのずと自分自身のあり方も変容してくる。その具体的な経験から体得したもんを持って、もとの環境に戻っていけばいい。逃避先やのうて供給場所としての村や」

セツはしばらく考え込んでから言った。

「私が村づくりに積極的になれなかった理由は三つある。一つ目は、生きてる以上、やむを得ずこれまで人格を作ってきたんだから、個以前に戻るより個の向こう側に行く方が順番として自然だということ。二つ目は、架空の獣のイメージも悪くないけど、限定された範囲の一部分っていうんじゃないかと、現実空間の一部分だという認識を持てるようになる方が、この会本来の理念と合致するということ。私は、もう鱗の刺青いれずみはなくしてもいいんじゃないかと思ってる」

「あれはなくすべきじゃない」室木が言った。「代表と僕たちを、代表の生き方と僕たちの生き方を結びつけてくれる、かけがえのない印なんだから。君はイーダを始祖鳥か何かみたいにイメージしてるのかもしれないけど、その方がはるかに短絡的で観念的だよ。イーダは形のない獣だ。輪郭線もサイズもない。それはたとえば、中が無尽蔵な構造をもつ球体みたいなもので、描けない。ただ確かな手ざわりだけがある」

話しているあいだ彼は、自分の胸の前あたりで、まるで『無題V』を掌に包んで温めているような手つきをしていた。青黒い闇の中、本当に彼の手中にそれがあるみたいだ。私はひやひやした。「わかった、こんなことを今持ち出したのは謝ります。刺青について話し合うのは次回にしましょう」とセツが半ば遮るように言い、つづけた。

「三つ目は、そんな土地をどうやって手に入れるのかという算段が全くついてないこと。私は、今ここでできることの実践を積み重ねて、結果的に『大きな存在の一部』になれていたらいいと思ってる」

「土地ならあるで。私が相続した山を、使ってくれていい」

驚いた様子のセツに、森瀬は畳み掛けた。

「三つだけか？」

「どうということ」

「四つ目の理由は、ないんか。『メンバーの大半が村づくりに興味を持っていない』とか」

セツは答えなかった。

「ないやんな。だって、調べてへんやろ、セツは。大半は自分に同調してくれてると思うてるやろ。私結構ここに入り浸ってたから、色んな顔ぶれのメンバーと知りおうてな。せっかくやから会うひと会うひとにアンケートしてたんや。集計取ってるなんて言わんと、それとなく会話の中に混ぜて一対一でな」

「アンケート？」

「目録と村、片方だけを選ぶんならどっちが本心に近いか。前者は十六人、後者は三十五人やった。そうや、セツには訊いてなかったから、十七人やな」

絶えず誰かが足を崩したり浅いため息をついたりしていた車座は、蓋でもされたように静まった。表情を隠した会員たちの顔が一拳に似通っていく。私は網戸越しの星に目を向けた。セツの味方に就ける発言をしたいと自分を駆り立てても、頭の中は空転するばかりだった。

それには理由がある。以前から私も森瀬と同じことを思っていたのだ。セツのやり方では、史乃のもつ衝動は受け止められない。ビラとセツトで配布されている、史乃考案の刺青シールは、セツに対する無意識の反抗のしるしに見えることがあった。

そもそも史乃一人の問題ではない。窮地に陥っている存在を見て見ぬふりしつづけ、しかし実際にとても温かく清潔な心をもつある人は、自分が聖人でないことを受け入れるために入会したと言っていた。また別の人は、個人では持ちこたえられない量の罪悪感が外から付着してくるのだと言った。自分を世界の果ての罪人にしないためにイーダの一部になるのだ、と。

「もちろん私たちはありがたいけど、せっかく相続した山を、そんな簡単に」

ようやくメンバーの一人が切り出した。

「うん。最初はそこまで踏み切る気はなかった。けど私は史乃が気に入ってん」

「ありがとう。この会に森瀬がいてくれてよかった。私の指導者に、なつてほしい」

すぐ隣で史乃が言った。史乃の考えていることは私には知りようがない。ただ、彼女が、まだ本当はそこまで振り切れていないのに振り切れたふりをした可能性はあると思った。不安で不安で倒れそうなとき、あんな顔を自分だけに向けられたら、それを失うことを恐れはじめてしまう。

今頃になって葡萄の匂いが鼻先を掠めた。

帰り道、私はセツと近くの蕎麦屋に寄った。彼女の方から誘ってくれた。めずらしくセツは佐原さんにも、「一緒に行こう。いつからそんな、食事を疎かにしてるわけ？」と声を掛けた。彼は頷かなかった。

月光のさす細い道に私のサンダルだけがぺたと音を立てる。店内はだしぬけに混みあっていて、相席でもいいの、と三角巾のおばさんが叱りつけるように訊いた。食事中もセツはほとんど口をきかなかった。垂らした髪を耳にきつく掛けて蕎麦を啜る顔は、悲しそうでも不機嫌でもなかった。ただ真剣な、私が咀嚼を忘れて見とれてしまうほど集中して何かを考えている、真剣な顔だった。

ジョギングを究めんとして集められたスニーカーやウェアやトレーニング器具や専門書や多機能ストップウォッチをしつかりと納戸に仕舞った父の、新たな趣味は精進料理だ。地元の有名人に影響されて押し花アートの世界を目指した直後、どこかの曲がり角で野草料理に魅了されたのがきっかけらしい。

私は最初のうち、父が早合点の毒草を摘んでくるかも知れないと思い遠巻きに見ていた。しかし彼は肉や魚を用いずにどれだけ高蛋白でおいしい献立を作れるかということに関心を広げ、やがて休日の食卓には、ヨモギスープやギボウシの白和えといった野性的な小鉢とともに、豆腐

と長芋のハンバーグなども並ぶようになった。

イーダ会の集まりに居合わせた翌々週のある日、家の郵便受けに私宛の葉書が入っていた。切手が貼られていない。赤い文字でこう書かれていた。

『あなたももう少し手を打つべきです』

ハイイロと署名されている。彼の声と同じく大きな字体だ。しかし、どこかから鉄はさまで切り抜いてきたようなあの声と違って、黒ずんだ赤いサインペンの筆跡は、その場でがんがんと響いていた。「恋人という立場でありながら無責任だ」という苛立ちと蔑さげすみ。梅雨の頃、佐原さんの隣室が空いたとたん入居したのはハイイロだった。

それにしても、「あなたも」というのがひっかかった。佐原さんの神経衰弱に、ハイイロが一体どんな手を打ってくれているというのだろうか？

その三日後の土曜の昼、早朝から草摘みをこなした父は台所でおからこんにゃくの唐揚げの下準備をしていた。コンロでは片手鍋の蓋が蒸気でかたかたと小刻みにふるえ、昆布と干し椎茸でとっただしの匂いが漂っている。

佐原さんにはうってつけの父だ、と私は気づいた。我家に呼ぶなら今日だ。実は彼に直接伝えたいこともある。内容が内容だから、メンバーの出入りの激しいあのアパートは避けたかった。

長い呼び出し音を経て電話はつながった。私は言った。

「うちに来ない？ よかったら、今から」

それから、まずない線だとは思ったが、場合によっては誤解を与える言い方だったかと気を回し、「父が、朝から精進料理を盛大に作っている」と家族情報を付け足した。佐原さんは誤解した。

「一年なんてあつという間だな。もう誕生会か」

「違うよ、それは十一月。お父さんの新しい趣味なの。急な招待で申し訳ないんだけど」私は訂正した。

報告すると父はいつもどおり一切詮索せず、「そうか、彼が来るんな

らいつそう腕によりをかけないとな」とにこやかに言った。母はパートに出かけている。私は掃除機をかけ、来客時用の柳模様のテーブルクロスに替え、父の指示で、天ぷらにするオオバコの葉の筋にナイフで切れ込みを入れた。佐原さんが招待に応じるといふ確信はなかった。

しかし、ワイシャツにタイ、プレスされた濃い灰色のズボン、見積もりに来た業者のような顔で佐原さんはインターホンを鳴らした。

彼は私を見ると、我に返ったように言った。

「誕生日プレゼントを用意してなかった」

私は気づかれないよう深呼吸してから、もう一度ゆっくりと訂正した。居間に通ず途中で割烹着かっぽぎの父も応対に出てきた。

「やあ。君は草もいけるくちだったか。とっておきのやつがあるんだよ」

「ご無沙汰しております。お招きいただきましてありがとうございます」

とっさに社会人のふりをした佐原さんは、三つ子の魂百までという言葉葉を私に連想させた。もともと、最初の誕生会でも彼はすでに十五歳で、三歳に近かったのは私の方だが。今日の趣旨がいくら彼の脳に定着しなくても目くじらを立てるべきではない。誕生会という、勝見家と自分の間の因縁のキーワードに変換されなければ、こうして家に来てくれることもなかっただろう。彼にはソファに掛けていてもらうことにして、私たちは仕上げのため台所に戻った。

うちの前の道では近所の子どもたちが、そこが他人の家の前であることなど忘れ去った騒々しきで遊んでいる。とりわけ荒いバウンド音がした後、生垣を越えて大きな水色のゴム鞆が飛び込んでくるのが、庭に面した窓から見えた。我家のインターホンを誰が鳴らすか早速責任をなすりつけあっている。佐原さんは首を伸ばし、私と父が野草にまみれているのを見ると、「私がとりに行きましょう」とソファから立ち上がった。玄関から回り、ガラスで隔てられた芝生に白シャツ姿を現す。彼が下手投げしたゴム鞆はしなやかで社会的な軌跡を描いた。生垣越しに、い

ちばん背の高い少年が両手で受け取る。ありがとうございます、という形に口が動いている。腰に手を当てた佐原さんはちょっと頷いた。

一度思い込んだら、訂正されてもしばらくすると最初の思い込みに戻ってしまう佐原さんは、精巧につくられた不思議な玩具がんぐみたいだった。どこでも生きていける大人のような見た目を保持していることが、「精巧」の印象に結びついているのだと思う。

私はまだあの少年の方に近い。骨格も仕事も不十分で、手の施しようがなく若い。佐原さんは父の方に近かった。本人によって着実に使い込まれてきた感じのする背中だ。すっかり変調をきたしたとはいえ、私より十三年も長く生きているそのひとに、私はこれからどんな手助けができるというのだろうか。

揚げたての天ぷら、ツユクサのおひたし、イタドリの炒め煮、飛竜頭ひりゅうづに胡麻豆腐、薬草茶で炊いた粥かゆなどを私はテーブルに運んだ。父の乾杯の音頭は「すべての野草のために」であった。恋人と、そうとは知らぬ父親との会話を聞くというスリルのある機会に恵まれたわけだが、想像以上に物騒なので途中から食事に専念した。

「最近仕事の方はどう」

「期限のない休みを頂いてます」

「体の具合でも悪いの」

「頭の具合です」

「しかし痩やせたよ。割りに筋肉質だっただろう」

「今日の御馳走のおかげで回復しますよ」

「またいつでも来てくれよな。娘だって、同年代の女の子と喋るだけじゃなく君の話を聞きたいはずだよ。年に一回しか会わない決まりがあるわけじゃないんだからさ」

「娘さんはよく私のうちに来られますが」

「なるほど」

私は席を立ち、冷蔵庫から取り出した海藻のゼリー寄せを切り分けて、彼らの前に置いた。二人は「ありがとう」と声を揃えた。ほどなく母が

帰宅し、食卓の上を飛び交う会話のほとんどを両親の声が占めるようになった。生垣の、緑色の長方形の向うに、時折水色の球体が弾む。私の知らない作法に則っているらしい、そのぶん不必要に遠慮することのない佐原さんの食べ方を、私は真似ようとした。同じように食べたいと単純に思った。一度佐原さんの携帯電話が鳴った。例の校正を頼もうと訪れた室木が、帰宅時刻を尋ねて掛けてきたようだ。

栄養を補給し、愛想を使い果たして、彼は勝見家を後にした。私は角まで送るという口実で一緒に玄関を出た。二人だけのときに話しておきたい件があったのだ。それは、返還するのが難しいならばらく『無題V』を私に預けてほしいということだった。私は室木が今一度「鱗」の重要性に立ち返ろうとしていたのが気にかかっていた。もし彼がイーダ会の象徴として『無題V』を本格的に取り上げ始めたら、それが盗品であると露見する可能性は高い。あの窃盗を正当化しているらしい室木の手の届くところにおいておくのはいかにも危うく思えた。

佐原さんは歩きながら私の話にじっと耳を傾けていた。私が話し終わっても傾けている。

見上げる者のからだを射抜くような、からりとした青空が広がっていた。私は道に落ちる影から影へと移りながらじぐざぐ進み、佐原さんはネクタイを弛めて首のボタンを一つあけ、一直線に歩いた。

「今から亜季がうちに取りにくるのか？」

「室木さんがいるんでしょ？ 明日誰もいないときに連絡をくれる？」

すぐに行くから」

佐原さんは「ふうん」と言った。角で私は足をとめ、ひらひらと手を振った。数歩行きかけて、彼はからだごと振り返った。

「そういうえば、六班の沼木康男は俺に何を言いたかったんだ？」

「がんばって、って言いたかったんじゃないかな？」

「へえ」佐原さんはいささか驚いたようだった。「それは今まで言われたことがないな」

引き返すと、ゴム鞆やバドミントンのラケットやシャトルばかりが路

上に散乱し、子どもたちの姿はごっそり消えていた。鬼ごっこでも始めたのだろう。家の中も静かだった。後片付けは趣味ではない父が、割烹着を外してソファで新聞を読んでいた。隣の母はテレビを見ている。

「おかえり」

父の目も、母の目もなごやかだった。自分の子どもに関して、なごやかなまなざしをしていられないことは映さないようにできてくる彼らの目の仕組みに、私はどんなときも影響できなかった。

「実は付き合ってる人がいて」

私は脇を引き締めてそう言った。両親は面白がってぎわめいた。

「どんな子だ」

「同じ高校なの？」

「今度いっぺんうちに連れてきなさい」

「いま帰ったばかりだよ」

私は言った。両親は表情を変えなかった。彼らにとって「命の恩人」は長らく、自分の子を育て続けるための明確な根拠だったと思う。でももうあの関係性は無効だ。二人はなごやかな目のまま、平常通りの三人の空気がなんとなく回復するのを待っていた。私はスリッパの足を踏ん張って、二人がそれを諦めるのを待った。部屋には佐原さんの気配が残っていた。今なら待つことができる。

「なんとなく近親相姦きんしんそうかんみたいだな」

とうとう父が浮かない顔で言う、母もすぐ「ちよつと気持ち悪いよね」とぼやいた。私は肩から力を抜き、陽気でもなく憂うれいもない鼻唄とともに大量の食器を流しに運んだ。

佐原さんから電話が掛かってきたのは、洗い物を終えて柳模様のテーブルクロスを折り畳んでいるときだった。

「あれはちゃんと返しに行っておいたから」彼は言った。

すぐには呑み込めず、そのあと心の中で叫んだ。今度は一体どんな思い込みと誤解に主導権を握られたのだろう。

「どうやって」私は尋ねた。

「入館料を払って。相変わらず客はいなかった。いや、ちがうな、石崎の当主夫婦と入れ違いだった。正確には客ではなく館長だが」

「監視員のおじさんは」

「入り口で当主夫婦にありとあらゆるお世辞を披露してた。その間にあれを台座に返した」

「監視カメラは」

「もの言わず天井にくっついてたけど」

私は床に座り込んだ。もしかしたら監視員はまだ台座に盗品の姿を発見していないかもしれない。しかしそれが、「何ごともなかったように元通り」という状況を保てなくなるのは、時間の問題だ。監視員は見つけ次第大至急カメラが記録した映像をモニターでチェックする。そのことを佐原さんがどの程度認識しているのか、訊こうと思った矢先、別の考えが浮かんだ。

盗品が戻ってきたとなれば、美術館としてはそれが本当に盗まれたものと同じか詳細に調査するだろう。もしニセモノだと明らかにされたら、盗まれた時点ですでに贗作がんさくだったという可能性が浮上する。そのときに史乃が間に合わず、まだ今の史乃のままとしたら、彼女の心はばらばらに割れてしまうだろう。そして、自分が誰かの瑕疵かじの原因となることに打ちのめされやすい佐原さんにとって、盗品の返還が史乃を苦しめるということとは、とどめになってしまう。

「それでよかったんだよな？」

返事がないのを不審に思ったららしい声が電話の向こうからした。私は口をひらいた。

「佐原さん、明日、雪の鳥取砂丘に行こう。いっぺん二人で広いところに行こう。寒いけどすごく綺麗なんだって。灰色の海と白い丘だけ。佐原さんもきつとくつろげる」

全部言い終わってから、季節が逆だと気づいた。頭がどうかしている。「うん。雪の日は駱駝らくだはどうしてるんだろう」

佐原さんは駱駝に主眼を置いた。乗り物酔いにさえふれなかった。そ

の「うん」は、平常心をなくしてふいに殺伐とした私にとって、まるで
こんこんと水の湧き出す小さな泉だった。

切符が買えたらまた連絡すると伝えて電話を切った。

それから私は着の身着のまま、今は必要最低限のものしか入っていない
いすかすかのリュックを背負って、史乃の家まで自転車をとばした。

台座に戻された『無題V』を盗みに行こうと持ちかけるためだ。

〈続く〉

牧田真有子（まぎた・まゆこ）

80年生。「椅子」で「文学界」新人賞奨励賞を受けデビュー。人が抱く寄る辺なさと、世界が孕む不確かさを、丁寧にすくいあげ描きとる。主な作品に「夏草無言電話」（「群像」09年5月号）、「予言残像」（「群像」10年6月号）、「今どこ?」（「WB」20号）、「合図」（早稲田文学記録増刊 震災とフィクションの「距離」）、「動物園の絵」（「早稲田文学」⑥）など。

早稲田文学・オン・ウェブ

copyright by Makita Mayuko 2014

published by wasedabungaku 2014